

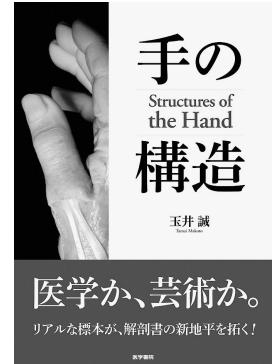
手の構造 Structures of the Hand

玉井 誠・著

【評者】 越後 歩

(札幌徳洲会病院整形外科外傷センター・
手外科専門作業療法士)

B5判・232頁
2024年4月
定価：16,500円
(本体15,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-05475-1
医学書院 刊



『手の構造 Structures of the Hand』は驚異的な解剖学書である。

著者の玉井誠先生は手外科の臨床家、解剖学者であり、写真家でもある。

手外科医としての冷静で的確な医学的解説と、艶やかで芸術的な手の解剖写真とのインテグレーションに魅了される。

玉井先生は2000～2003年にかけ、米国のケンタッキー州ルイビルにご留学された。手外科医としての臨床業務に並行して、手の解剖に心血を注がれ、自ら撮影された写真は1.5万枚以上にも及ぶという。

姉妹書である『The Grasping Hand: Structural and Functional Anatomy of the Hand and Upper Extremity』(Thieme)は、Dr. Guptaと玉井先生の共同編集で2020年に出版され、2023年には玉井先生、村田景一先生監訳で『The Grasping Hand 日本語版一手・上肢の構造と機能』(医学書院)が出版されている。こちらの書籍でも玉井先生が撮影した写真を基に、手外科のエキスパートたちによる手の解剖に関する詳細な情報や臨床との関連が記されている。この『The Grasping Hand』とは異なる角度から、臨床家の目線で、手の構造について簡潔に解説したのが、本書『手の構造 Structures of the Hand』であり、美しい解剖と撮影技術で、厳選された標本の一枚一枚

が収められている。

他の解剖書と大きく異なるのは、標本の質感である。標本は新鮮屍体を用い、組織の変性が抑えられ、組織の硬さ、柔らかさは生体に近いものである。また、組織の乾燥を防ぐために、撮影中の標本の質の維持にも配慮されている。

変性・変色した標本に慣れている私たちにとって、筋肉の張りや質感、神経と腱の微妙な色の違い、腱膜や靭帯の線維の方向など、これまで得られなかったさまざまな情報を知ることができる。

また、工夫を凝らした解剖や撮影のアイデアが素晴らしい。読者の左手と見比べるため、標本は左ページに印刷されている。写真の背景は漆黒であり、解剖された手が空中に浮かんでいるように見える。組織には光沢があり、組織ごとに異なる色や硬さの違いが伝わってくる。

皮線を含む皮膚を残し、深部組織との関係を示した画像や、手関節の靭帯や線維の方向を示した画像、手関節尺側部の詳細な構造、血液供給網を示すための立体的な層、屈筋・伸筋腱と支帯、コンパートメントを示した画像など、読者が未体験の美しい標本を多数含む。

20年の歳月をかけ上梓された本書は、手外科分野にかかわる医師や療法士が手の解剖学的構造や配置だけでなく、その状態や質感までを学ぶことができる最良の一冊である。